

## 小学生の服装にみる洋装化

○末久 真理子\*、酒井 哲也\*、森本 代子\*\*、酒井豊子\*\*

(\*共立女大・\*\*放送大)

<目的>日本は明治の開国以来、皇室が率先して洋装を正式な服装に定め、政府要人、軍隊や官吏などの制服として洋装化が広められた。しかし、庶民全体の洋装化はかなりの時間を要している。本研究では、時間的变化が捉え易いと考えられる小学生の洋装化に注目し、洋装化の進展の軌跡を実証的に調査し、その経過を地理的、社会的、経済的背景などとの関係において考察する。

<方法>ある時代の様子を推定させる指標として、当時の写真、特に地域的、経年的変化を見るのに適当な卒業記念写真からのデータを用い、まず、洋服・和服の着用割合を調査した。調査地域は、明治政府の産業立国政策下における絹産業の重要な拠点の一つであった高崎・前橋を中心としたJR高崎線沿線の地域、及び、幕末から明治後期まで生糸の運搬に利用された“絹の道”の要めとして栄え、生糸の集散地でもあった八王子地域などを対象とした。

<結果>服装調査の結果、どの小学校の場合も洋装化は男子が女子より早かった。明治30年から40年代のかなり早い時期に、ごく少数であるが、市街地の小学校において洋服の着用者が時々現れている。しかし、暫くはとくに増加することなく推移するが、大正期から明瞭な増加傾向が認められた。高崎線沿線で比較すると、洋装化は東京に近いところから順次伝搬するのではなく、東京から北上すると同時に高崎から南下していったことがわかった。この現象には、各地域の産業の発展の軌跡が関係していると思われる。